

# 乳幼児の発達を促す絵本の読み聞かせ —理論と実践をつなぐ視点から—

著者：金子 智昭・寶川 雅子

所属：鎌倉女子大学

英文タイトル：Promoting Infant and Toddler Development Through Picture Book Reading: Perspectives Bridging Theory and Practice

英文著者名：Tomoaki KANEKO・Masako HOUKAWA

英文所属：Kamakura Women's University

要旨：

本論は、乳幼児の発達を促す絵本の読み聞かせについて、近年の国内外の研究動向を整理し、理論と保育実践を架橋する視点から、絵本の教育的価値と具体的な活用のあり方を検討することを目的とした。先行研究を概観した結果、絵本の読み聞かせは、言語能力や思考力などの認知的発達のみならず、共感性や向社会的行動などの社会情動的発達、さらには読書態度の形成にも寄与することが確認された。また、乳幼児の発達に及ぼす影響に関しては、読み聞かせの「量」と「質」の双方によって支えられていることが明らかとなった。これらの理論的知見を踏まえ、保育現場における絵本の活用を支える保育者の専門性を、「選書」「環境構成」「子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用」という三つの視点から整理した。一方で、保育現場をフィールドとする実践研究においては、保育者の専門性のどの要素が子どもの発達のどの側面にどのように影響するかは十分に明らかにされていないことが確認された。今後は、理論と実践の往還を通じ、絵本を基盤とした保育者の専門性を可視化し、専門性の発揮が子どもの発達に及ぼす影響プロセスを精緻に解明することが課題である。

キーワード：絵本の読み聞かせ、乳幼児の発達、保育者の専門性、  
理論と実践の往還、保育実践

## 1. はじめに

絵本は、子どもの感性や想像力、言語能力、社会情動的能力など、多面的な発達を促す重要な児童文化財である。日本では、2000年の「子ども読書年」を契機としてブックスタートが開始され、幼少期から子どもが絵本に触れる機会が増えるとともに、絵本を介した親子の情緒的なやり取りが活発化した。

絵本の意義について、藤本<sup>1</sup>は「絵本は、子どもが生まれて初めて出会う文学であり、芸術である」と述べ、単なる読み物にとどまらず、子どもが芸術や言語の世界に初めて触れる契機となることを指摘している。つまり、子どもは絵本を通して現実の生活に先立ち、多様な事物や出来事に触れるとともに、形態・色彩・質感・リズムなどの感覚的・芸術的要素に接する機会を得ると考えられている。また、大人による読み聞かせや語りかけを通じて、新たな言葉（音）と出会い、言語能力の育ちが促されるとも言える。

保育所や幼稚園では、このような絵本の意義を踏まえ、絵本を保育に活用することが求められている。たとえば、現行の「幼稚園教育要領」<sup>2</sup>における領域「言葉」では、絵本に親しむことを通して、言葉に対する感覚を豊かにし、想像力を働かせ、保育者や友達との心の交流を深めることが示されている。しかし、実際に絵本を保育に活用する時、絵本は多様なジャンルや内容をもつため、その選書や環境構成、読み聞かせの方法、子どもとのやり取りや共有の仕方、さらにはそれらを基盤とした多様な活動への展開方法には、保育者の高い専門性が求められる。したがって、保育者は絵本の教育的意義を理解した上で、保育に活用する確かな専門性を身につける必要がある。

以上の課題を踏まえ、本論は近年の研究動向を概観し、絵本の教育的意義を理論的に検討するとともに、その理論を基盤として、保育現場における絵本の活用に必要な保育者の専門性を明らかにすることを目的とする。絵本の意義は、親と保育者の絵本に対する認識および発達心理学的知見をもとに整理し、保育者の専門性は、①選書、②環境構成、③子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用、という3つの視点から検討する。理論と実践を架橋する観点から、絵本の教育的価値と具体的な活用のあり方について論じる。

## 2. 絵本の教育的意義—理論的観点から—

### (1) 家庭と保育における絵本の教育的意義

幼児期の絵本の読み聞かせは、家庭と保育の両方の場面において教育的意義をもつことが示されている。高井・塘・伊藤・薦田<sup>3</sup>は、親が絵本の読み聞かせの意義をどのように認識しているかを検討し、①子どもの認知的発達や学習への動機づけを促す機能と、②親子のふれあいや想像を豊かにする機能の二つの側面から捉えていることを

明らかにした。さらに、こうした認識は、家庭での読み聞かせの頻度や絵本の所蔵数と正の関連を示しており、親が絵本の意義を理解しているほど、家庭における読み聞かせの実践が積極的に行われる傾向が示唆された。秋田<sup>4</sup>は、読み聞かせの意義を捉える理論的枠組みとして、読み聞かせの過程において生じる「内生的意義 (endogenous meaning)」(例：空想の世界を楽しむ、親子のふれあい) と、読み聞かせの結果として生じる「外生的意義 (exogenous meaning)」(例：読解力や語彙力をつける、早く寝かしつける) の2つに識別している。そして、多くの親が「文字・知識習得」という外生的意義よりも、「空想・ふれあい」という内生的意義を重視していることを明らかにした。

一方、保育の場においては、絵本の読み聞かせが集団ならではの教育的価値をもつことが報告されている。横山・水野<sup>5</sup>は、幼稚園での読み聞かせ場面の観察と保育者へのインタビューを通して、保育における絵本の意義を検討した。その結果、①保育者と子どもとの信頼関係の上に形成される共有体験 (一体感) の積み重ね、②絵本と子どもの生活との連続性の実現、すなわち、保育者が子どもの生活や興味、発達に即して選書した絵本を通して物語と日常的経験がつながること、の二点が重要であることを明らかにした。これらの知見は、絵本が家庭では子どもの認知や動機づけを促しつつ親子の情緒的交流を支え、保育の場では子ども同士や保育者との一体感を形成し、日常の遊びや生活を豊かにする教育的資源として機能していることを示唆している。

## (2) 子どもの発達を促す絵本の教育的意義

### ① 認知発達への影響

乳幼児期における絵本の読み聞かせは、言語能力をはじめとする認知発達を促すことが明らかにされている。海外では、Demir-Lira, Applebaum, Goldin-Meadow, & Levine<sup>6</sup>は、アメリカにおいて、1歳から2歳半の子どもを対象に親子の自然な読み聞かせ場面を観察し、親子の会話量や家庭の社会経済的要因 (親の収入・学歴)、子どもの初期言語能力を統制した上で、親による読み聞かせが8～9歳時点の子どもの言語・リテラシー関連能力 (語彙、読解、読字、読書への動機づけなど) に及ぼす影響を縦断的に検討した。その結果、読み聞かせの頻度が高いほど、子どもの語彙理解力、読解力、そして読書への内発的動機づけが高いことを明らかにした。

国内の研究では、ベネッセ教育総合研究所<sup>7</sup>が年少から中学3年生までを対象に行った追跡調査により、幼児期に親子で絵本や本に触れる経験が、児童期におけるひとり読みの頻度という読書習慣の形成や親子での読書体験の共有につながり、さらに中学3年時点の語彙力向上にも寄与することが明らかになった。雨越・森下<sup>8</sup>は、保育所に通う幼児を対象に、読み聞かせが言語力やワーキングメモリーの発達を促すことを明らかにした。大久保・佐藤・浜名・野澤<sup>9</sup>は、読み聞かせの日数が多いほどかな文字

の読解能力が高いことを示した。さらに、池田・魚里・板倉<sup>10</sup>は、防犯教育用の絵本を用いた実験を通じて、4～6歳児が未知の人物から誘われる場面において、適切な回避行動を選択し、その理由を説明できるようになることを確認した。この結果は、絵本の読み聞かせが危機認知や判断力の発達にも寄与することを示すものである。

以上の知見から、絵本の読み聞かせは、乳幼児の言語や思考、判断力など、多面的な認知的発達を支える重要な経験であることが示唆される。

## ②社会情動的発達への影響

絵本の読み聞かせは、共感性や向社会的行動の形成など、社会情動的発達を促すことが明らかにされている。海外では、OECD<sup>11</sup>が実施した国際幼児学力・幸福度調査（International Early Learning and Child Well-being Study: IELS）において、イングランド、エストニア、アメリカの5歳児を対象に、親による読み聞かせと子どもの発達との関連を検討した。その結果、読み聞かせの頻度は、子どもの言語的理解力や語彙力といったリテラシー領域だけでなく、共感性や向社会的行動といった社会情動的スキルとも有意な正の関連を示した。特に、週5～7回の読み聞かせを受けた子どもは、初期リテラシーおよび情動調整の得点が高く、家庭の社会経済的地位（SES）を統制した後もその効果が維持された。これらの結果は、絵本を介した親子の相互作用が、子どもの認知的発達と情動的発達の双方を促進する重要な要因であることを示唆している。

国内では、中道<sup>12</sup>は、4～6歳児を対象に「共有」を主題とする物語絵本の読み聞かせを行い、他児への分配行動が促進されることを示した。この結果は、物語の主題理解を通して向社会的行動が喚起される可能性を示すものである。岩崎<sup>13</sup>は、絵本の読み聞かせにおいて母子間の情動的なやり取りが生まれることの重要性を指摘し、このような相互行為が子どもの社会情動的発達を支える基盤になることを明らかにした。内田・齋藤・菱山<sup>14</sup>は、母親による情緒的サポート（温かい声かけ、視線、子どもの主体性の尊重など）が、子どもの集中や興味を高めることを示しており、読み聞かせ場面が情動的な交流の場として機能することを明らかにした。また近藤・山本<sup>15</sup>は、自閉症スペクトラム障害の子どもを対象に、集団での絵本の読み聞かせが共同注意や情動共有を促進することを明らかにし、発達支援の有効な手段となり得ることを示唆した。さらに、泰羅<sup>16</sup>は、脳科学的観点から、絵本の読み聞かせが喜怒哀楽といった基本的情動の形成や表出に関与する大脳辺縁系の活動を活性化させ、情動体験を通じた人格形成の基盤となる可能性を指摘している。

以上の知見から、絵本の読み聞かせは、共感性、情動理解、他者との関係形成など、社会情動的発達を支える重要な営みであることが示唆される。

### ③読書態度への影響

吉田・藪中<sup>17</sup>は、小学校1・2年生を対象とした質問紙調査により、幼児期の読み聞かせ経験が、就学後の読書への好意や読書量の増加につながることを示した。この結果は、幼児期の読み聞かせが、後の読書活動に対する肯定的態度の形成に寄与することを示唆している。さらに、鄭<sup>18</sup>は、保護者を対象とした調査を通じて、家庭での読み聞かせが幼児の自己制御能力や注意の焦点化を高めるとともに、幼児期からの安定した読書習慣の形成を促すことを報告している。これらの研究は、絵本の読み聞かせが単に認知発達や社会情動的発達に寄与するだけでなく、読書への内発的動機づけや読書習慣の基盤を形成する重要な営みであること示唆している。

### ④読み聞かせの「量」と「質」の影響

大久保ほか<sup>9</sup>は、家庭での読み聞かせの頻度（量）と親子の関わりの質の両方に注目し、読み聞かせの日数が多いほどかな文字読み能力が促され、質の高い関わりほど情動理解能力が促されることを明らかにした。これにより、読み聞かせの「量」によって言語的側面、「質」によって社会情動的側面の発達が支えられている可能性が示唆された。岩崎<sup>13</sup>および内田ほか<sup>14</sup>は、読み聞かせの質的側面、すなわち親の情動的かつ相互的な関わりが、子どもの認知的・情動的発達を支えることを明らかにしている。これらの知見は、読み聞かせの量と質が相補的に機能しながら子どもの発達を支えることを示唆している。

## 3. 絵本活用における保育者の専門性—実践的観点から—

絵本の読み聞かせに関する研究は、主に「家庭での読み聞かせ」と「集団での読み聞かせ」の二つに大別される<sup>19</sup>。前者は大人と子どもの二者間で行われ、子どもの興味や発達のペースに応じた柔軟な対応が可能である。これに対して、後者は、保育者と子ども、さらには子ども同士の関わりを含むものであり、集団特有の相互作用や集団力学が存在することが指摘されている。以下では、保育現場における「集団での読み聞かせ」を支える保育者の専門性について検討する。

横山<sup>20</sup>は、子どもが絵本と出会い、絵本を通して発達を促すための保育者の専門性を、①選書、②環境構成、③集団への絵本の読み聞かせ、④体験を深め、発達を支える、の4つの視点から整理している。

第一の「選書」は、子どもの姿を見取りながら、育ちに必要な絵本や実践に取り入れたい絵本を選ぶことで、絵本との出会いを広げる役割を担う。第二の「環境構成」は、空間・仲間・時間の三つの間を工夫し、絵本との出会いをつくる役割を担う。第三の「集団への絵本の読み聞かせ」と第四の「体験を深め、発達を支える」は、いずれも絵本を介して子どもの経験を広げ、発達を支える点で共通している。具体的には、集団

内での読み聞かせの工夫や、保育者と子ども、あるいは子ども同士の一体感の形成、さらに絵本の内容を遊び(ごっこ遊びや劇遊び)に発展させることなどが挙げられる。これらの多様な関わりを通して、子どもの経験や生活がより豊かに発展する。

そこで本論では、第三および第四の視点を統合し、「子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用」という一つの視点に整理した。この整理により、保育者の専門性は、①選書、②環境構成、③子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用の3つの視点で論じることが可能となる。

この3つの視点は、近年開発された「新・保育環境評価スケール1<3歳以上>」<sup>21</sup>「新・保育環境評価スケール2<0・1・2歳>」<sup>22</sup>における「保育者による絵本の使用」および「絵本に親しむ環境」の項目と対応している。具体的には、①「選書」は「クラスの活動に即した本が読まれたり、子どもが利用したりしている」、②「環境構成」は「手に取れる本のほとんどが子どもに親しみやすく配置されている(例:本は棚に詰め込まれず、表紙が見やすく置かれている)」、③「子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用」は「保育者自身が絵本に興味をもち楽しんでいる(例:動きをつけながら読む、絵本を見ている子どもに対応する)」「子どもの興味に応じて、一緒に本を見ながら疑問を明らかにし、情報を得ようとする活動を支援している」、といった項目に対応する。

このように3つの視点は、横山<sup>20</sup>の理論的枠組みを包含しつつ、現場でも適用できる実践的視点を有している。したがって、以下では、この3つの視点に沿って、先行研究の知見を踏まえつつ内容を整理・検討する。

#### (1)「選書」に関する研究知見

絵本の選書は、子どもの発達段階や興味・関心に応じて絵本を見極める保育者の専門的判断が求められる営みである。

坂本<sup>23</sup>は、乳児期(誕生から1歳半頃まで)、幼児期前半(1歳半から3歳頃まで)、幼児期後半(3歳から就学前まで)の各発達段階に応じた絵本の選書および保育実践における絵本活用のあり方について考察している。乳児期には、色や線がはっきりした絵本を選び、絵本を媒介として大人とのコミュニケーションを大切にすることが重要とされる。幼児期前半には、生活絵本や簡単な物語絵本が適しており、ものや人との関わりを多くもつ活動の中で絵本を楽しむことが大切である。さらに、幼児期後半には、絵本の「はじめ・なか・おわり」といった物語の構成を理解し、物事の因果関係や登場人物の心情の変化を読み取る力が育つことから、登場人物の人柄や気持ちを通して友だちへの理解を深めたり、多様なジャンルの絵本に親しみながら、ごっこ遊びや劇遊びへと発展させることが大切である。

佐藤・松井・上村・祝・趙<sup>24</sup>は、保育者および大学生を対象としたインタビュー調

査を行い、絵本を選択する際の理由として、次の4つの特徴を明らかにした。すなわち、①子どもの想像力を育むことを意識して選ぶ（「非現実」）、②保育者自らが経験した保育活動の中での子どもの姿から選ぶ（「子どもの姿」）、③絵や物語の内容そのものに着目して選ぶ（「絵本の内容」）、④子どもの日常生活における絵本の活用効果を期待して選ぶ（「活用効果」）である。

藤岡・伊藤<sup>25</sup>は、幼稚園の3年間にわたる保育記録を基に、3歳児・4歳児・5歳児クラスでどのような絵本が選定され、読み聞かせが行われたのかを検討した。絵本の種類は、「シリーズ絵本」「年中行事に関連した絵本」「季節の絵本」「園生活に関連する事柄を含む絵本」「繰り返し構造の絵本」「昔話絵本」「言葉の感覚を育む絵本」に分類された。分析の結果、「年中行事に関連した絵本」はどの学年も3学期に多く見られ、また、展開が予測しやすく話が短い「繰り返し構造の絵本」は3歳児の1・2学期に多く、学年が上がるにつれて減少する傾向があること等が明らかとなった。

さらに、植坂<sup>26</sup>は、公立幼稚園において、大学と地域が連携し、保育者が絵本の選書について学べる協同的研修プログラムの開発とその効果を検討している。研修プログラムの流れは、①幼児になったつもりで読み聞かせを聞き、講師からのレクチャーや質疑応答を通して学ぶ、②グループで絵本の特徴や幼児の育ちとの関連について考察する、③幼児への読み聞かせのビデオを視聴して学びを深める、④振り返りを行う、というものである。このような研修を経て、特定の絵本の読み聞かせが子どもたちのイメージを膨らませ、ごっこ遊びや生活発表会などの表現活動へと発展した事例が報告されている。

以上の研究から、絵本の選書は、子どもの発達段階を踏まえつつ、保育者が子どもの姿や保育のねらいを総合的に判断して行う専門的実践であると言える。また、このような力量の向上を目的とした研修の有効性も示されている。

## (2) 「環境構成」に関する研究知見

絵本環境を構成する際には、絵本の表紙が子どもに見えるように配置するとともに、子どもが仲間とゆったり絵本を共有できる空間を整えること、さらに、子どもが自ら気持ちを落ち着かせたり切り替えたりするために絵本を手にする時間を保障することが求められる<sup>20</sup>。

山田<sup>27</sup>は、幼稚園でのアクションリサーチを通して、絵本コーナーの設定上の具体的なポイントを8つの視点から整理しており、例えば、「複数種類の場所（じっくり読めるゾーン、気軽に読めるブラウジングゾーン、図鑑を中心とする調べ物ゾーン）」といった構成を提案している。また、山田<sup>28</sup>は、幼稚園における子どもの読書行動を観察・分析し、絵本の読み方と場所との関係、ならびに表紙の見え方の効果について検討している。その結果、カーペットやテーブルでの読書時間が長いこと、ま

た、一人で読む場合と友達と1冊の本を共有して読む場合が多いことが明らかとなった。さらに、絵本の表紙の見え方の効果は、特に絵本コーナーに十分に定着していない子どもにとって大きいことが示されている。

上田<sup>29</sup>は、保育環境の写真資料を分析し、そこに込められた保育者の意図やねらいを検討している。その分析の中で、5歳児クラスの保育室において、絵本コーナーに「あいうえお表」を掲示することで、子どもが文字に関心をもち、まだ文字を十分に覚えていない子どもでもこの表を見ながら絵本を選べるようにしていることが紹介されている。絵本コーナーは、ままごとコーナーや製作コーナーと異なり、絵・文字・写真などのラベル表示が少ないことが指摘されている<sup>30</sup>。しかし、「あいうえお表」の掲示によって、子どもの文字理解や関心を促すとともに、絵本を自ら選ぼうとする主体的な姿勢を支えることができるとも考えられる。

さらに、上田<sup>29</sup>は、絵本の収納方法における配置の違いにも着目している。「種類ごとに整理して背表紙を色ごとに分けて並べる配置」と「表紙が見えるように多様な種類の絵本を並べる配置」とでは、保育者の意図の相違が表れているとされる。具体的には、前者は同種・同形による秩序的で美的な配置によって子どもの興味・関心を引き出す意図があり、後者は表紙の視認性を高めることで、子どもが絵本を手に取りたくするような関心を喚起する意図があると考えられる。

これらの研究は、絵本環境の構成が子どもの絵本への関わり方や主体的な選択に影響を及ぼすことを示している。また、中澤・杉本・衣笠・入江<sup>31</sup>は、絵本の読み聞かせにおけるグループサイズが5歳児の物語理解やイメージ形成に及ぼす影響を検討し、3人群で最も読み手―聞き手の相互作用が促されることを明らかにしている。この知見は、環境構成の一要素としての「集団の構成（人数設定）」が、子どもの物語理解や想像の深まりと関連していることを示唆している。

### (3) 「子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用」に関する研究知見

絵本の読み聞かせを通して子どもの経験を広げ、発達を支えるための保育方法は多様であり、これまでに多くの研究が蓄積されてきた。

本論では、先行研究の知見の全体像を体系的に把握するために、次の3つの観点から整理する。第一は、保育者が読み聞かせをどのようなねらいで位置づけ、子どもとの相互作用をどのように形成しているかを検討した研究（「保育者の意図と関わりに焦点を当てた実践的研究」）である。第二は、保育者の読み方や表現方法が子どもの理解・感情・発話に及ぼす影響を実証的に明らかにした研究（「読み聞かせの方法とその効果を検討した実験的研究」）である。第三は、絵本の読み聞かせを契機として、子どもがどのように遊びや生活へと経験を広げ、発達を支えているかを示した研究（「読み聞かせ後の活動の展開と経験の広がりに関する研究」）である。これら3つの視点を通して、

子どもの経験を広げ、発達を支える保育者の専門性を多角的に検討する。

#### ①保育者の意図と関わりに焦点を当てた実践的研究

絵本の読み聞かせに関する実践的研究では、保育者の意図や子どもとの関わりに焦点を当て、子どもの発達段階や集団の特徴に応じた援助のあり方が検討されている。

子どもにとっての絵本との出会いは、0歳児の乳児期から始まる。菅井<sup>32</sup>は、乳児の発達と絵本とのかかわりを整理する中で、保育所における乳児保育での絵本の読み合いの特徴を明らかにしている。それによれば、乳児保育では、乳児が主体的に絵本の絵を手で探索したり指さしたりしながら、周囲の保育者や子どもたちと注意を向け合い、絵本を共有して読む姿が見られる。特に、この時期の乳児保育では、個人差や月齢差が大きく、通園開始時期や在園時間も子どもによって異なるため、一人ひとりに応じた多様な読み合いの姿が見られる。例えば、低月齢児と保育者が一対一で膝の上に座って読む姿や、複数の乳児と保育者が一緒に絵本を囲んで読む姿などが観察される。保育者はこのような特徴を踏まえ、子どもが指さした対象の意味を丁寧に受け止め、愛情豊かに応答しながら、他児との共有や相互的なかかわりへと発展させていくことが求められる。

一方で、杉本<sup>19</sup>は、集団での読み聞かせが成立し、言語発達の変化が著しい1歳児クラスを対象として、絵本の読み聞かせ場面を観察し、保育者の関わり方や集団内でのコミュニケーションの変化を検討した。その結果、発達差の大きい1歳児保育においては、保育者による援助である「足場かけ（代弁）」が言語発達途上の子どもの会話参加を可能にする一方で、援助をあえて控え、子ども自身の考えや行動に委ねる「足場外し」が子ども同士の言語的なやりとり（学び合い）を促すことを示した。これらの結果から、「足場かけ」と「足場外し」の適切な使い分けは、集団生活における子どもの言語獲得やコミュニケーションを支える重要な機能を果たしており、保育者の専門性の一側面として詳細に検討する必要があると考えられる。同じく、1歳児を対象とした平澤<sup>33</sup>は、保育所の1歳児クラスにおける読み聞かせ場面を観察し、1歳児が意図を伝えるために用いる身振りの特徴と、それに対する保育者の援助のあり方を検討した。分析の結果、1歳児の身振りには「要求」「説明」「質問」などの機能があり、「基本的指さし」「模倣」「凝視・覗き込み」などの種類が確認された。さらに、保育者は子どもの声の変化などの微細な手がかりを捉え、応答を修正しながら援助していることが明らかになった。

中楯・山内<sup>34</sup>は、幼稚園の2歳児クラスを対象に、保育経験28年の熟達保育者1名と、幼稚園教諭免許状および保育士資格を有する専攻科学生2名による読み聞かせを比較し、両者の間にどのような差異がみられるかを検討し、熟達保育者の読み聞かせの特徴を検討した。その結果、熟達保育者の読み聞かせの特徴として、「登場人物の動

き・感情・状況を、読み方の工夫によって表現する」「登場人物の感情・状況を自分の表情でも表現する」「登場人物の動きを自分の動作でも表現する」「子どもが真似しやすい動作を繰り返す」「登場人物によって声をかえる」「擬態語、擬音語を生かして、場面を盛り上げる」「文字のないページで擬音語を用いて場面を表現する」「本自体を動かして、躍動感を表現する」「抑揚をつけてストーリーの展開を明確にする」「人や動物ではない図形等も登場人物とみなし表現する」「微笑みながら、子どもに視線をむける」の11点が認められた。

菅井<sup>35</sup>は、保育士を対象に質問紙調査を行い、3歳未満クラスと3歳以上クラスの絵本場面における子どもの参加行動および保育士の読み方の違いを比較した。その結果、子どもの行動には年齢による特徴が見られた。具体的には、3歳未満では、絵を指さす、手でつかもうとする、絵と同じものを持ってくる、絵本をなめたりかじったりする、立ち上がって歩くといった行動が多く、一方、3歳以上では、最後まで座って絵本を見る、文字を読むふりをするなど、より落ち着いた行動が多かった。このことから、3歳未満の子どもは、自分の身体を用いて絵本世界と現実世界を行き来しながら関わりを楽しむ経験を繰り返し、その後、言葉を中心とした想像世界へと発達していくことが示唆される。また、保育士の読み方にも年齢による違いが見られ、3歳未満では子どもが声を出しても最後まで聞く傾向があったのに対し、3歳以上では静かに座るように声をかける傾向があり、発達段階に応じて関わり方を柔軟に変化させていることが示唆された。

同様の研究として、仲本<sup>36</sup>は、3歳未満児と3歳以上児の担当保育者における読む活動のねらいや方法の相違を検討した。その結果、3歳未満児を担当する保育者は、「子どもと絵本を通して会話をしながら読む」「発した言葉を受け止めながら読む」「本に出てくるものの名前を教えながら読む」など、言葉や行動を介したコミュニケーションを重視していることが示された。一方で、3歳以上児を担当する保育者は、「できるだけいろいろな本を読む」「読んだ後に内容を子どもとともに振り返る」「子どもが読める部分は子どもに読ませながら読む」「子どもの聞く態度に注意しながら読む」など、本の内容への興味・関心を深めること、読む主体性を育てること、聞く態度を育てることに配慮していることが明らかになった。

幼児期後半を対象とした研究では、保育者のねらいに応じた環境構成や読み聞かせのあり方に焦点が当てられている。並木<sup>37</sup>は、研究対象校の幼稚園の入園年齢である4歳児クラスの読み聞かせ場面を観察し、保育者がどのような環境を用意し、読み聞かせの間にどのような動作や発話を行っているのか、また、それらの言動が幼児の発話にどのような影響を与えているのかを検討した。その結果、①幼児が安定して絵本に集中できる環境を整えること、②幼児のイメージを具体化する保育者の発話や、イメージを豊かにするための「間」をとることで絵本への関心が高まること、③読後に

絵本に関する幼児の気づきや遊びを言語化・共有化することでクラス全体の共有体験の場となること、の3点が示唆された。

また、横山・水野<sup>38</sup>は、幼稚園5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察および保育者へのインタビューを通して、保育者の読み聞かせにおける意図と実践の特徴を検討した。その結果、①保育者は選書や読みの最中に、絵本の内容を子どもの生活体験と結びつけていること、②保育者の発話は絵本の文章を読む最中ではなく、主に読み聞かせの前後に集中していることが明らかになった。これは、5歳児クラスでは物語の流れを遮らずに読み進めることで、物語理解を重視しているためである。さらに、③保育者のねらいは、絵本の読み聞かせのスタイル（随時説明を加える「コメント型」、読みの前後でやりとりを行う「対話型」、言いたいことを最後に簡潔に伝える「要約型」と関連しており、④保育者は、子どもからの自発的な発話や保育者の意図・ねらいに沿った発話を聞くことで、集団での読み聞かせの意義である「一体感」を感じていることが示唆された。

一方で、発達障害のある子どもを対象とした絵本の読み聞かせに関する研究も散見される。近藤・山本<sup>15</sup>は、自閉スペクトラム症（ASD）児の共同注意と情動共有の発達を促すことを目的として、集団での絵本の読み聞かせを活用した支援方法を検討した。その結果、①子どもの興味・関心のある対象を絵本の内容と結びつけ、情動的に安心できる・楽しい雰囲気をつくること、②毎日同じ時間に同じスタイルで読み聞かせを繰り返し、見通しをもてる安定した状況を設定すること、③特定の大人が子どものそばに寄り添い、その子と絵本への注意や情動を共有すること、の3点が重要であることが示唆された。

## ②読み聞かせの方法とその効果を検討した実験的研究

これまでの実践的研究が、保育者の意図や関わりと子どもの相互作用を記述的に明らかにするものが多いのに対して、実験的研究は、読み聞かせの方法が子どもに及ぼす影響の因果関係を明確にしようとする試みが多い。

松村・根岸・宇陀<sup>39</sup>は、年長児を対象に、絵本の読み聞かせ後の問いかけが子どもの物語理解とイメージ形成に及ぼす影響を検討した。その結果、問いかけを行う群は、問いかけを行わない統制群に比べて物語理解度（物語中の事象や登場人物の心情理解）が高い一方で、物語の続きを口頭で作話し、その内容を分析して測定されたイメージ形成量は低いことが示された。村松・森・宇陀<sup>40</sup>は、5・6歳児を対象に、登場人物を大げさに演じ分けて読み聞かせを行うことの効果を検討した。その結果、演じ分けによる読み聞かせは、物語の理解には影響しない一方で、登場人物の心情理解を妨げたり、登場人物への印象に偏りを生じさせたりする可能性が示唆された。並木<sup>41</sup>は、幼稚園の4・5歳児クラスを対象に、絵本の読み聞かせにおける「抑揚をつけ

て読む」と「淡々と読む」という読み方の違いが、子どもの身体的および言語的反応に及ぼす影響を検討した。その結果、4歳児においては、抑揚をつけて読むことで子どもの興味を引き、集中を促す一方、淡々と読むことで絵への関心が高まり、絵に関する言語的反応が多くみられることが明らかになった。これに対し、5歳児では、抑揚をつけて読むことにより、読み方そのものに反応して発言したり、友達と絵本の世界を共有したりする言語的反応が促されることが示された。

### ③読み聞かせ後の活動の展開と経験の広がりに関する研究

クラスで共有した絵本がごっこ遊びや劇遊びに展開するなど、絵本は子どもの遊びと密接に結びついている<sup>20</sup>。岩崎<sup>13</sup>は、絵本の読み聞かせが子どもの語彙発達に与える影響プロセスを検討し、子どもの言語発達を促す上で、絵本の読み聞かせ後に展開活動(例:絵本に登場したものを絵に描いたり、内容について話し合ったりするなど、子どもの自己表現の場をつくる)を設けることを推奨している。

岩澤・菅沼<sup>42</sup>は、幼稚園・保育所・認定こども園を対象に実施した質問紙調査において、読み聞かせ後に見られる幼児の具体的な姿を5つの類型(「絵本の内容を試す姿」「絵本に出たものを観察する姿」「絵本の内容の活動をする姿」「絵本の内容について先生や友達と話す姿」「絵本に出てきたものを描いたり作ったりする姿)」に分類し、幼児が絵本の影響を受けて多様な活動を展開していることを確認している。

全国保育問題研究協議会<sup>43</sup>は、近年、各園から絵本を起点とした遊びや活動の提案が増加していることを指摘している。具体的には、『もこもこもこ』をもとにした表現遊び(1歳児クラス)や、『もりのおばあさん』をもとにした劇遊び(5歳児クラス)など、絵本の物語世界を保育の中で展開する実践が報告されている。また、忍者になりきるなど、子どもたちが物語の世界を日常生活の中で楽しむ姿も見られている。

このような絵本や物語の世界が主体的な遊びへと展開していく過程では、保育者は子どもの心情を深く理解し、子どもたちとともに絵本や物語の世界を楽しむとともに、時にはその世界を広げるために、子どもの想像する気持ちや行動を誘発することが求められるとされる<sup>44</sup>。

## 4. まとめと今後の課題

本研究では、近年の研究動向を踏まえ、絵本の教育的意義を理論的に検討するとともに、その理論を基盤として、保育現場における絵本の活用に必要な保育者の専門性を明らかにすることを目的とした。

第一に、絵本の意義について、読み聞かせの当事者である親と保育者の視点から検討した。その結果、幼児期の絵本の読み聞かせは、家庭では子どもの認知や学習への動機づけを促しつつ親子の情緒的交流を支え、保育の場では信頼関係に基づく共有体

験（一体感）の形成や生活との連続性を生み出す教育的営みとして機能していることが示された。さらに、発達心理学的観点からは、絵本の読み聞かせの「量」と「質」が相補的に作用し、認知的発達、社会情動的発達、そして読書態度の形成といった多面的な発達を支える基盤的な営みであることが示された。

第二に、保育現場で絵本を活用する際に求められる保育者の専門性について、横山<sup>20</sup>を参考に、①選書、②環境構成、③子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用、の3つの視点から整理・検討した。

絵本の選書について、保育者は子どもの発達や興味・関心、季節や行事といった園生活の流れを考慮しながら、保育のねらいに即して絵本を選んでいることが明らかになった。さらに、植坂<sup>26</sup>の研究からは、保育者の選書力を高めるための協同的研修で得られた学びが、実際の保育実践に活かされ、読み聞かせを通じた豊かな表現活動へと発展する可能性が示された。

絵本コーナーの環境構成には、一定の設定上のポイントがあるものの<sup>27</sup>、保育者の意図やねらいによって創造的に形づくられるものであり<sup>29</sup>、子どもの主体的な絵本選択にも影響を与えることが示された<sup>28</sup>。さらに、中澤ほか<sup>31</sup>の研究により、集団の人数設定が子どもの物語理解と想像の深まりに影響を及ぼすことが明らかにされ、空間配置のみならず、人的配置も重要な視点であることが確認された。

子どもの経験を広げ、発達を支える絵本活用については、多くの研究が蓄積されていることを踏まえて、以下の3つの視点から体系的に整理した。

第一の「保育者の意図と関わりに焦点を当てた実践的研究」では、乳児期から幼児期にかけて保育者の意図や関わりが変化していくこと確認された。例えば、絵本と出会う0歳児では、保育者は子どもが指さした対象の意味を丁寧に受け止め、愛情豊かに応答することで、他児との共有や相互的な関わりへと展開させていく。集団での読み聞かせが成立する1歳児では、保育者による援助である「足場かけ」や「足場はずし」を適切に適用し、子どもの身振りや声の変化を手がかりに応答的に関わる姿が見られる。3歳未満の子どもは、自分の身体を用いて絵本世界と現実世界を行き来しながら関わりを楽しむ経験を繰り返し、その後、言葉を中心とした想像世界へと発達していく。幼児期の4・5歳児では、子どもが物語の内容を理解し、自らの経験と結びつけて表現しようとする姿が見られ、保育者は発言を丁寧に受け止めつつ、子ども同士の気づきやイメージを共有する場を支える役割を果たしている。

第二の「読み聞かせの方法とその効果を検討した実験的研究」では、読み聞かせ後の問いかけや登場人物の演じ分けが、子どもの理解やイメージ形成に与える影響が検討され、効果的な読み聞かせ方法が一定の妥当性をもって提示されている。これらの研究は、読み聞かせの技法を実証的に裏づけるものであり、保育者の実践を科学的に支える知見として重要である。

第三の「読み聞かせ後の活動展開と経験の広がりに関する研究」では、子どもは絵本の影響を受けて多様な出来事を体験しており<sup>42</sup>、そのような活動における自己表現が語彙の獲得につながる可能性が指摘されている<sup>13</sup>。さらに、絵本を起点とした多様な実践が報告されており<sup>43</sup>、子どもは絵本に描かれている空想の物語世界を現実の生活や遊びに取り入れることで、社会性・想像力・言語能力などの多面的な発達を促されることが示唆される。

本論の意義は、乳幼児期の絵本の読み聞かせが、認知的発達、社会情動的発達、読書習慣の形成といった多面的な発達に及ぼす影響を検討し、それを支える保育者の専門性を体系的に明らかにした点にある。一方で、保育現場をフィールドとする実践研究においては、保育者の専門性のどの要素が、子どもの発達の中の側面に、どのように影響するか十分に明らかにされていない。今後は、理論と実践の往還を通じ、絵本を基盤とした保育者の専門性を可視化し、専門性の発揮が子どもの発達に及ぼす影響プロセスを精緻に解明することが期待される。

## 5. 引用文献

- <sup>1</sup>藤本朝巳（著）『子どもと絵本—絵本のしくみと楽しみ方—』、人文書院、2015年。
- <sup>2</sup>文部科学省「幼稚園教育要領」、2018年。
- <sup>3</sup>高井直美・塘利枝子・伊藤一美・薦田未央「親が考える絵本の読み聞かせの意義と関連要因—子どもの反応からの親の気づきに注目して—」、発達心理学研究、2025年、第36巻、第3号、143-156頁。
- <sup>4</sup>秋田喜代美（著）『読書の発達過程』、風間書房、1997年。
- <sup>5</sup>横山真貴子・水野千具沙「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義—5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から—」、教育実践総合センター研究紀要、2008年、17号、41-51頁。
- <sup>6</sup>Demir - Lira, Ö. E., Applebaum, L. R., Goldin - Meadow, S., & Levine, S. C. Parents' early book reading to children: Relation to children' s later language and literacy outcomes controlling for other parent language input. *Developmental Science*, 2019, Vol. 22, No. 3.
- <sup>7</sup>ベネッセ教育総合研究所「ダイジェスト版 幼児期から中学3年生の家庭教育調査 縦断調査」、2025年。
- <sup>8</sup>雨越康子・森下正修「幼児期の集団および家庭における絵本の読み聞かせと認知能力」、日本教育工学会論文誌、2020年、43巻、4号、339-350頁。
- <sup>9</sup>大久保圭介・佐藤賢介・浜名真以・野澤祥子「絵本の読み聞かせと幼児のかな文字識字および情動理解の関連—読み聞かせの量・質・開始時期に着目して—」、発達心理学研究、第35巻、第4号、227-239頁。

- <sup>10</sup> 池田彩夏・魚里文彦・板倉昭二「絵本の読み聞かせによる防犯教育の効果の検証」、発達心理学研究、2019年、第30巻、第4号、288-298頁。
- <sup>11</sup> OECD. Early Learning and Child Well-being: A Study of Five-year-olds in England, Estonia, and the United States. OECD Publishing, 2020.
- <sup>12</sup> 中道圭人「絵本の形態・物語が幼児の分配行動に及ぼす影響」、保育学研究、2024年、第62巻、第1号、31-42頁。
- <sup>13</sup> 岩崎衣里子「乳幼児への読み聞かせが豊かな言語発達を育む」田島信元・佐々木丈夫・宮下孝広・秋田喜代美(編)『歌と絵本が育む子どもの豊かな心—歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ—』、ミネルヴァ書房、2018年、245-257頁。
- <sup>14</sup> 内田伸子・齋藤有・菱山侑子「しつけスタイルが学力基盤力の形成に影響するか—共有型しつけは子どもの語彙獲得や学ぶ意欲を育てる鍵」、内田伸子・浜野隆(編)『世界の子育て格差—子どもの貧困は超えられるか』、金子書房、2012年、141-154頁。
- <sup>15</sup> 近藤みえ子・山本理絵「集団での絵本の読み聞かせを通しての自閉症スペクトラム幼児の発達支援—共同注意・情動の共有に着目しての実践の分析より—」、保育学研究、2013年、第51巻、第3号、318-330頁。
- <sup>16</sup> 泰羅雅登(著)『読み聞かせは心の脳に届く—「ダメ」がわかって、やる気になる子に育てよう—』、くもん出版、2009年
- <sup>17</sup> 吉田佐治子・藪中征世「幼児期の絵本の読み聞かせが就学後の読書に及ぼす影響」、摂南大学教育学研究、2015年、第11巻、33-46頁。
- <sup>18</sup> 鄭曉琳「幼児の自己制御能力の発達における絵本の読み聞かせの効果」、日本教育心理学会第65回総会発表論文集、99頁。
- <sup>19</sup> 杉本貴代「読み聞かせ場面を手がかりとした1歳児の遊びと学び合いの形成過程と保育者の専門性」東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(監修)『発達保育実践政策学研究のフロンティア 第1巻 保育の実践科学』、中央法規、2021年、301-329頁。
- <sup>20</sup> 横山真貴子(著)「保育における子どもと絵本の出会い—出会いをつくり、発達を支える保育者の専門性—」『発達177 特集 絵本とのあたらしい出会いから』、ミネルヴァ書房、2024年、2-9頁。
- <sup>21</sup> テルマ・ハームス(著)、リチャード M.クリフォード(著)、デビィ・クレア(著)、埋橋玲子(訳)『新・保育環境評価スケール1<3歳以上>』、法律文化社、2016年。
- <sup>22</sup> テルマ・ハームス(著)、デビィ・クレア(著)、リチャード M.クリフォード(著)、ノリーン・イエゼジャン(著)、埋橋玲子(訳)『新・保育環境評価スケール2<0・1・2歳>』、法律文化社、2018年。
- <sup>23</sup> 坂本美頼子「子どもの発達と保育と絵本」、玉置・大阪保育研究所(編)『保育のなかの絵本』、かもがわ出版、2015年。

- <sup>24</sup> 佐藤智恵・松井剛太・上村眞生・祝小力・趙京玉「保育者の絵本選択の理由と経験年数との関連に関する研究」、幼年教育研究年報、2007年、第29巻、59-64頁。
- <sup>25</sup> 藤岡久美子・伊藤恵理菜「幼稚園における絵本の読み聞かせの選書の分析—3年間の記録から—」、山形大学 教職・教育実践研究、2016年、第11巻、59-68頁。
- <sup>26</sup> 植坂友理「絵本選びについて学び保育者向け研修プログラムの開発とその展開—ある公立幼稚園における地域・大学との協同的実践の記録—」東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（監修）『発達保育実践政策学研究のフロンティア 第1巻 保育の実践科学』、中央法規、2021年、85-118頁。
- <sup>27</sup> 山田恵美「保育における空間構成と活動の発展的相互対応—アクションリサーチによる絵本コーナーの検討—」、保育学研究、2011年、第49巻、第3号、20-28頁。
- <sup>28</sup> 山田恵美「幼児の活動の展開を支える保育環境—絵本コーナー内の場と読み方—」、保育学研究、2012年、第50巻、第3号、263-275頁。
- <sup>29</sup> 上田敏丈（著）「保育環境の中に見る保育者の専門性」『発達134 特集 これからの保育者の専門性』、ミネルヴァ書房、2013年、28-33頁。
- <sup>30</sup> 平賀信夫・平野あゆみ「保育におけるラベル表示の効果に関する研究」、愛知教育大学教育実践総合センター紀要、2006年、9巻、203-209頁。
- <sup>31</sup> 中澤潤・杉本直子・衣笠恵子・入江綾子「絵本の読み聞かせのグループサイズが幼児の物語理解・イメージ形成に及ぼす影響」、千葉大学研究紀要、2005年、第53巻、203-210頁。
- <sup>32</sup> 菅井洋子（著）「乳児期からの絵本の読みあいの発達—絵本を身体で探索し読みあう共同活動へ—」『発達177 特集 絵本とのあたらしい出会いから』、ミネルヴァ書房、2024年、10-17頁。
- <sup>33</sup> 平澤順子「保育所1歳児クラスの絵本場面における保育者支援の役割—縦断的研究の分析を通して—」、保育学研究、2019年、第57巻、第2号、87-99頁。
- <sup>34</sup> 中楯茉奈実・山内淳子「熟達した保育者の絵本の読み聞かせの特徴—保育者志望の学生の読み聞かせとの比較を通して—」、山梨学院短期大学研究紀要、2016年、第36号、74-87頁。
- <sup>35</sup> 菅井洋子「保育所における乳幼児期の絵本場面に関する発達研究—保育士への質問紙調査からみる3歳未満クラスの特徴を中心に—」、川村学園女子大学研究紀要、2011年、第22巻、第1号、227-250頁。
- <sup>36</sup> 仲本美央（著）『絵本を読み合う活動のための保育者研修プログラムの開発—子どもの成長を促す相互作用の実現に向けて—』、ミネルヴァ書房、2015年。
- <sup>37</sup> 並木真理子「幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響」、保育学研究、2012年、第50巻、第2号、165-179頁。
- <sup>38</sup> 横山真貴子・水野千具沙「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義—5歳

児クラスの読み聞かせ場面の観察から一」、教育実践総合センター研究紀要、2018年、第17巻、41-51頁。

<sup>39</sup> 松村敦・根岸舞・宇陀則彦「絵本の読み聞かせ後の問いかけが子どもの物語理解とイメージ形成に与える影響」、日本教育工学会論文誌、2014年、38巻、Supple.号、157-160頁。

<sup>40</sup> 村松敦・森田花・宇陀則彦「絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響」、日本教育工学会論文誌、2015年、39巻、Supple.号、125-128頁。

<sup>41</sup> 並木真理子「幼稚園における集団への絵本の読み方が幼児の身体的・言語的反応に及ぼす影響」、絵本学：絵本学会研究紀要、2010年、第12巻、59-68頁。

<sup>42</sup> 岩澤優海・菅沼敬介「幼児教育において直接体験を促す絵本活用に関する研究」、福岡教育大学紀要、2025年、第74号、第4分冊、83-92頁。

<sup>43</sup> 全国保育問題研究協議会（編）『文学で育ちあう子どもたち 絵本・あそび・劇』、新読書社、2021年。

<sup>44</sup> 読みあう活動研究会（著）・樋口正春（編）・仲本美央（編）『絵本から広がる遊びの世界』、風鳴舎、2017年。